「ミユルレルに対し当時の政府の要路では，専に医学教育のことのみならず，一般教育制度のこと，政治法律のこと，軍事や工業のことまで，種々諮問した。ミユルレルは其に応ずれば，高い地位に昇り，多額の俸給を得らるることは知つて居たが，ミユルレルは自分の有してゐた医学教育設定に関する使命に全力を傾注することを堅く決心してゐたから他の事柄には一切指を染めなかつた。ミユルレル等の前に来た外国人，特に米国人（フルベッキのことと思われる）などは，１人で何事にでも関係して顧問となつたものもあつた(242)」といつている。

以上のことからも，「学制」に対するアメリカ的考え方の影響とりわけジェファソンの自然の貴族制的考え方の影響は一般に予想される以上に大きなものであつたということができるのである。もつとも，「学制」の自然の貴族制的考え方は，ジェファソンの自然の貴族制とは異り，教育行政上に民意の反映を可能ならしめる仕組が考慮されておらず，又，授業料制度を積極的に認めるものでもあり，ジェファソンのそれほど高い公共性をもつものではなかつたことは確かなことであり，注意すべき点であるといえる。

以上，主として，「学制」とフルベッキとの関係に焦点を合せてみてきたのであるが，その後の彼の人生を概観するならば，以下のようなものである。すなわち，彼は，１８７２年（明治６年）１２月から満５年間の契約で正院の翻訳局に雇い入れられたことはすでにみてきたところであるが，彼は，この新しい職場において各国法典の翻訳等の事業に従事しているのである。しかして彼のなした主なる仕事はスイスの法学者であり政治家であり又，チユーリツヒ大学の教授でもあつたブルンチユリー（Johann Caspar Bluntschuli）の国家法（Staats－recht(243)解説づきの2,０００の法律上の格言（Two Thousand Legal Maxims with Commentary），ナポレオン法（Code Napoleon）を含む欧米諸国の憲法，森林法「仏国森林法同施行法令」，法形式の概論（a compendium of forms），その他数多くの法政上の記録等の翻訳に自ら従事し又は協力したことである。彼のこの期の貢献について，グリフイスは，１８８９年（明治２３年）に帝（みかど）から，臣民に下付された憲法が何故にあれほどリベラルであつたのか，フルベッキが，それより２０年，３０年前に何をやつていたかを理解することなしには，とうてい理解しうることではないといつているのである(244)。

しかし，このようなグリフイスの評価は，この期のフルベッキを過大評価しているものといわざるをえない。というのは，もうこの期になると，法律の専門家でなかつたフルベッキにとつて箕作らの発する専門的な質問に答え得なくなつており，１８７２年（明治５年）には江藤新平らの申し出により，フランスから法学士ブスケ（George Bousguet）が招聘され，次いで１８７３年には，法学博士の称号をもつボアソナード（Gustave Emile Boissonade de Fontarabie）が招かれており(245)，この分野でのフルベッキの重要性はすでに，半減していたものと考えられるからである。事実，彼は１８７５年（明治８年）頃から本格的な布教活動に入つており(246)，又，１８７７年（明治１０年）から１８７８年には新らたに設立された華族女学校に非常勤で英語等を教えに出たりしているのである。これは彼の日本政府における仕事が全く閑職となりつつあつたことを物語るものであるといえる。

しかして，１８７８年契約がきれると共に勲三等旭日章を授与された後，彼は政府の仕事から一切手をひいて布教伝道活動に専念することになつているのである。政府の雇を解かれた後一旦はアメリカにもどつているが，すでに無国籍人つまり国際浮浪者となり果てていた者に満足な仕事のあるはずもなく，アメリカには数か月滞在しただけで再び日本に舞いもどり(247)日本において，宣教師達仲間の白眼視にたえな

がらも聖書の翻訳，直教講演による大衆教化運動及び明治学院の創立並びに明治学院神学部における教授活動等に残りの２０年間を奉げているのである。しかして，彼はキリスト教が日本において急速にひろまり数百という教会が次々と組織され，何万人もの日本人がキリスト教に改宗していくさまをみては喜び，その後日本のキリスト教が潮のひくように衰退していくさまを悲しみのうちにみとどけながら，東京で病気のため永眠(248)。青山墓地に葬られたのである。晩年のフルベッキは地位的にも経済的にも全く恵まれず誠に悲痛な晩年であつたといわれている。

第三節　フルベッキの斡旋で渡米した者と来日した者

フルベッキの６８年にわたる生涯のうち，我々に最も深い関係をもつたのは，結局，長崎時代とその後江戸（東京）へ出てからの５年間とみることができるのである。しかして，この期間中，特に日米の教育交渉という点からみて見逃しえないものに，次の二つのことがあつたと考えられるのである。その第一としては，海外留学生及び視察者，特にアメリカに留学を希望する者の世話であり，その第二は，お雇い外国人教師その他の斡旋である。

まず，海外留学生及び視察者の世話に関してみるに，フルベッキは，アメリカにおけるオランダ改革派教会の海外布教団本部の理事長フェーリスを通して，多数の日本人学生をアメリカに送りこんでいるのである。当時のアメリカ留学生の多くがフルベッキ，フエーリスを頼りに渡米したため，そのうちのすくなからぬ者が，フルベッキ・フエーリスの属していたオランダ改革派教会の設立するラトガス・カレッジ（Rutgers College）に入学しているのである。又ラトガス・カレッジは，アメリカに渡つたオランダ移民をアメリカ化する役割をも引き受けており，その創設の当初より英語教育が重視されていたのである(249)。しかして，特許状にも大学は，学生達に，英語に関する知識を文法的に教えるべきことが明記されており，そのために特に文法学校（Grammar School）が付置されることになつていたのである。しかして，学内においてはオランダ語の使用を禁止するため英語以外の言葉は一切用いてはならないという規定も設けられており(250)ラトガス大学の雰囲気は，外国人である日本人の留学するには格好の大学であつたと考えられるのである。しかして，１８５６年に最初に２名の日本人留学生がラトガスのグラマー・スクールに入学を許可されて以来，極く短期間滞在したものまで含めると，ともかく，ニューブランスウイックにやつて来て，グラマー・スクールに，あるいは，大学に籍を置いたものの数は約３００名におよんだといわれているのである(251)。フルベッキとフエリスの斡旋でアメリカに留学したものの数は約５００名といわれているところから，(252)約６０％が，ともかくもラトガスに立ち寄つていたことがわかるのである。一時は，グラマー・スクールの生徒から，ラトガス大学の学生まで合せると約３０名からの日本人が，ニューブランスウイックに滞在していたといわれているのである。(253)しかもこれらの留学生のうち，１８６９年以前にラトガスに留学したものの大部分は，長崎でフルベッキに英語の手ほどきを受けた者達であつたのである(254)。

ところで，これら３００名もの日本人留学生の大部分は，グラマー・スクールの生徒であり，英語及びその他の基礎教科を学んでいたのである。彼等のうち何名かはグラマー・スクールの課程を修了後，アナポリスの海軍兵学校，レンセレア・ポリテクニックインスティテユート，アマースト大学，コロンビヤ大学，プリンストン大学等ラトガス大学以外の大学にも進学しており，ラトガス大学に入学したものはわずかに１４名で，そのうち２名が古典課程に，他の１２名は科学課程に入つているのである。更にそのうち大学の課程を修了することのできたものはわずかに４名にすぎないのである。なお，

ラトガス大学から分離独立した神学校，ホープ・カレッジに入学したものは，さきにふれた大儀見師と，木村熊次の２名で彼等は共に卒業にまでこぎつけている。(255)

最初に，フルベッキの紹介状を携えてラトガスに留学した二人の留学生とは，幕末の著名な思想家であつた熊本藩士横井小楠の甥であり，横井左平太時明の子息で，横井左平太時治，横井太平の兄弟であつた。当時，フルベッキに師事していた横井小楠が，フルベッキにこの二人の甥の教育を託し、彼等の米国留学の斡旋を依頼したのである。(256) 彼等は伊勢佐太郎，沼川三郎の変名で，フルベッキからの紹介状とわずか１００ドル分の金とをもつて，フエリスを頼つて渡米したのである。フエリスは，この国禁を犯しまさに命がけで海を渡つた，二人の青年のために，いまだ日本人に対して偏見のひどかつた，ニューブラウンスウイックの町をかけづりまわり，ついに，ジエムズロメイン博士（Rev. D, James Romeyn）の未亡人（Mrs. Romeyn）が寄宿していた，ヴアン，アースデイル夫人（Mrs. Van Arsdale）の経営する学生寄宿舎に彼等を住み込ませたのである。(257) 彼等は，この二人の夫人に親切にされ，又，校長マケルヴイ（Rev. Alexander Mc Kelvey）の同意をえて，グラマー・スクール入学も許可され，かねてからの希望であつたアナポリス海軍兵学校入学のための準備をこのグラマー・スクールで行うことになつたのである。兵学校入学の希望は，まもなくフエーリス及びニュージャージー撰出の上院議員フレリングヒユーイセン（Frederick Frelinghuysen）等の尽力によつてアメリカ合衆国議会の承認を得，異例の措置としてかなえられたが，(258) 伊勢左太郎を名乗つていた兄の左平太の方は，兵学校におけるいくつかの試験に不合格となり(259) 失意のうちに政治経済に転向，約６年程滞在した後帰国。元老院の権少書記官となつている。しかしまもなく病いをえて不帰の客となつているのである。沼川三郎を名乗る太平の方は，三年足らずで胸を病んで帰国。病を養いながら，ジエーンズを招いて熊本洋学校を創立することに奔走しているのであるが，洋学校の開校式を待たずに死んでいる。(260) 彼等に続いて，数多くの日本人がラトガスに学んでいるのであるが，横井兄弟同様，病いにたおれ，異国の地で若くして不帰の客となつたものが，すくなからずいたことは注目すべき点といわざるをえない。当時，ロンドンに留学した山崎小三郎が南貞助と共に「無金にて着英のうえ，大いに困窮にて朝夕衣食の事も弁じがたく，昼夜とも服をも替えず，かつ居処に火炉等も無くして深冬を凌ぎ誠に無窮の貧困(261)」の末，ついにロンドンで無残にも胸を病んで客死したといわれているが，それは頂度，横井兄弟がラトガスのグラマー・スクールに入学を許可された年でもあつたのである。ロンドンでの山崎の話ほど悲惨ではないにしても，これに似た話は，ラトガス留学者の中にもいくつかみられるのである。

たとえば，フルベッキに「私の知つている日本の青年中稀にみる英才」と折紙つきで送り込まれた福井藩士日下部太郎は(262) 非常に優秀な成績で４年まで進み，有能な数学家といわれていたが，卒業をまじかにひかえ病（多くの留学生と同様肺結核）を得て，１８７０年（明治３年）の４月死亡。大学のある町，ニューブランスウイックに葬られているが，特に大学から卒業を認められ，学生友愛会から Phi Beta Kappa（Φ. B. K.）の名誉を授与され，その黄金の鍵が当時学生友愛会の世話係であつたグリフイスの手で，日本の父親に送りとどけられているのである。(263) こうした挿話には我々の涙をさそうものがある。

このようにしてむなしく死んでいつたものの数は，ニューブランスウイックのウイロウ・グローヴ共同墓地（Willow Grove Cemetery）に埋葬されたものだけで９名にも達しているのである。(264) ちなみに，このウイロウ・グローヴの共同墓地に埋葬された人々の中には，福沢諭吉の門下生で，「西洋学校軌範」の著者小幡

甚三郎の名前もみえるのである。彼は，ラトガス・グラマー・スクールで学んだ後，コロンビア大学に学んでいたが，ニューヨークのブルックリンで客死，後，何人かの日本人の眠つているウイロウ・グローヴに移されているのである。(265) 彼等ウイロウ・グローヴに眠る人々は，おそらく異国の地において，自らの志を果しえず，あせりにあせつて死んでいつたものと考えられるのであるが，このように命がけで国を想い，私心のない，ひたすらな目的指向的行為故に，彼等は彼の地においても非常に高く評価され，多くの人々の理解と援助とを得ることができたのだと考えられるのである。ここでサンソムの指摘しているように吉田松陰の物語が英国の小説家スティーヴンソンの心をゆりうごかしている事実を思いだしておくことは，我々の問題すなわち日米の教育交渉を考える上にも大きな参考になると考えられるのである。(266)

しかして，フルベッキやフェーリスの世話で渡米したこれらの留学生達は幸運にも留学中，海外布教団本部のフェーリスらに金銭的にも非常な援助を受けることになり，特に幕末から廃藩置県当時留学したものは，政変のあるたびごとに藩からの送金がとだえてしまう場合もすくなくなかつたから，そのような場合には，フェーリスは，わざわざ援助のための資金を募つて，これらの留学生の窮乏を救つたといわれているのである。フェーリスらのこのような厚意に対して，遣外使節団の一行がアメリカ滞在中に，岩倉大使が，大久保副使と連名で，フェーリスあてに丁重なる礼状を送つていることは，改めて記憶されてしかるべきこととといえる。

ちなみに，彼の地においてあらゆる困難にもめげず，フェーリスらの暖かい理解と援助に支えられ，ラトガスで学んだものを持ち帰り，日本の近代化にすくなからぬ貢献をなしえた人々及びラトガスの記録に残つている人々の主なるものを紹介するならば，それは次のようなものである。

	氏　　名	出身地	課程・その他	帰国後の地位・その他
1.	横井左平太（伊勢佐太郎）	熊本	ラトガス・グラマー・スクールから，アナポリス海軍兵学校へ進学，中退。後，政治経済を学ぶも志を遂げえず落胆のうちに帰国。（滞米6年）	元老院書記 まもなく病没。
2.	横井太平（沼川三郎）	熊本	グラマー・スクールからアナポリス海軍兵学校へ。 中退，病いをえて帰国。	熊本洋学校の設立に尽力。開校を前に病没。
3.	日下部太郎	越前（福井）	1867年ラトガス大学科学課程に入学。 1870年に優秀な成績で4年に進級するも肺結核のため客死。特に優等の成績で卒業を認められる。	

	氏　　名	出身地	課程・その他	帰国後の地位・その他
4.	富田鉄之助	仙台	グラマー・スクールから Whitney Business College に進学。	ニューヨーク，サンフランシスコ等の領事。その後，銀行家，火災保険，および海上運送保険会社社長となる。
5.	畠山義成（杉浦弘蔵）	薩摩	ロンドン大学から１８６７年ラトガス大学科学課程に入学。１８７１年まで在学。日下部ほど優秀ではなかつたが，努力家でキリスト教徒になつたと記録されている。	岩倉一行の通訳，マーレイの通訳となり，更に開成学校校長，内務省，外務省，文部省等につとめ，過労のため病（肺結核）をえ，フィラデルフィア万国博の帰途病没。
6.	市来和彦（松村淳蔵）	薩摩	グラマー・スクールから１８６８年にラトガス大学の科学課程に進学。一年在学した後，アナポリス海軍兵学校に転学。兵学校を卒業している。	帝国海軍軍人となる。
7.	吉田清成（永井五百介）	薩摩	ロンドン大学から１８６８年，ラトガス大学科学課程に転入学。しかし，その年のうちに帰国。	大蔵省，外務省につとめる。
8.	服部一三	長州	１８７１年，ラトガス大学科学課程に入学。１８７５年には卒業。卒業式には日本語で挨拶したと記録されている。	東京大学予備門，主幹となり後法科大学学長。東京大学副総長となる。その後，地方長官として岩手，長崎，広島等の各県知事を歴任，更に外務省に入り，ロンドンの総領事ともなつている。貴族院議員に列せられる。
9.	白峯駿馬	?	１８７１年，ラトガス大学科学課程に入学。一学期間のみ在学。	造船業界で活躍。（神奈川県で）
10	オオツカ，ヤスジロウ	?	１８７２年，ラトガス大学科学課程に入学。１８７４年まで在学。	

	氏　　名	出身地	課程・その他	帰国後の地位，その他
11	ハラ・ヤスタロウ	?	1873年ラトガス大学科学課程に入学。	農林省に入る。後，地方長官を歴任。
12	オオガワ・ゼンキチ	?	1873年ラトガス大学科学課程に入学。	会社顧問。
13	オーサワ・ヨシロウ	?	1873年ラトガス大学科学課程に入学。	
14	工藤誠一	東京	グラマー・スクール二年在学の後，1874年にラトガス大学古典課程に入学。後，科学課程に入り両課程を修了している。	文部省に入り，札幌農学校教授となる。
15	大儀見元一郎	静岡	1875年にポープ．カレッジに入学。1879年に卒業している。	東京麹町教会の牧師となる。
16	木村熊次	?	1875年にポープカレッジに入学。1879年に卒業している。	東京駐在のオランダ改革派教会の宣教師となる。
17	勝小鹿（海舟の息子）	静岡	グラマー・スクールに二年以上在学。後，アナポリス海軍兵学校に進学。卒業。	帝国海軍軍人。
18	ナンブ（南部）マサシ．ナラ	? 南部	おそらく，グラマースクール中退。	帝国海軍軍人 大隈英麿の弟。
19	ヤマモト(山本)ジユスケ	長州	グラマー・スクールからレンセレア．ポリテクニツク　インステイテユート。	鉄道技師となる。
20 21 22	三井の三兄弟 ヨーノスケ ヨーゾー ? 客死		おそらく，グラマー・スクール中退。	ヨーノスケ．ヨーゾーは，銀行家となる。
23	折田彦一		グラマー・スクールから1872年にプリンストン大学に入学。1876年に卒業。キリスト教に改宗。	文部省に入り。マーレイの補佐をつとめる。 東京大学教授となる。
24	神田乃武（孝平の息子）		グラマー・スクールに6ケ月在学した後，アマースト大学に進学。そこを卒業している。キリスト教徒となる。	東京大学において，英語及びラテン語の教授となる。
25	岩倉具定（具視の二男）	京都	グラマースクールに2ケ年間在学。	大政官及び元老院書記となる。

	氏　名	出身地	課程，その他	帰国後の地位，その他
26	岩倉具経（具視の三男）	京都	グラマースクールに二ケ年在学の後，オクスフォードに進学。	外務省に入り，セント．ペテルスブルグ公使館員となる。
27	K．T．ミナミ（具視の息子）	京都	グラマー．スクール	ニューヨーク，サンフランシスコ等の領事となる。
28	大隈英麿（大隈重信の婿養子）	南部	1871年，グラマースクール	東京専門学校校長
29	山川健次郎	会津	グラマー・スクールから英国へ留学	東京大学教授，後，総長となる。
30	タケムラ	?	グラマー　スクール	大蔵省に入る
31	オオクボ	?	グラマー　スクール	東京大学植物園長となる。
32	カワムラ		グラマー　スクールからイタリヤに留学	画家
33	ナグラ	静岡	グラマー．スクール	外科医
34	マツダイラタダナリ	信濃	1879年ラトガス大学科学課程卒業。	外務省に入る。
35	松方小次郎		グラマー・スクールからラトガス大学科学課程に進学	
36	大石熊吉郎		ラトガス大学	
37	ツチヤ　S		グラマー・スクール	
38	ノマ・マサイチ		グラマー・スクールからコロンビヤ大学へ。	外交官
39	多久乾一郎		グラマー・スクール	宮内省に入る。

最後に，このようにして，ラトガスに学んだ日本人留学生と，ラトガスの教官との間にどのような緊密な関係が出来つつあつたかを知るための一つのエピソードとして，マーレイの勝海舟訪問についてふれておきたいと思う。勝海舟は子息小鹿をアナポリスの海軍兵学校へ入学させる目的で，フルベッキに斡旋してもらい，(268) まず，ラトガスのグラマー・スクールに入学させていたのである。マーレイは小鹿の数学の教師であつた関係から，マーレイが来日するや通訳高橋是清を伴つて，小鹿の父，海舟を訪ねているのであるが，この事実に関して，高橋は，「元来，モーレー博士は，アメリカにゐる時，勝小鹿君の数学の先生であつた。それで今度日本に来たからには先ず勝さんに会つて，小鹿君の消息を伝へ，安心させたいというのが訪問の主旨であつた。(269)」と語つており，このエピソードからもフルベッキとフエーリスを橋渡しとしてくりひろげられた明治初期における日米の教育交渉が，想像以上に深いものとなりつつあつたことを知ることができるのである。

次にフルベッキ．フエーリスの第二の貢献すなわち，お雇い外人教師その他の斡旋についてみるならば，大学南校の化学教師グリフイス（William Elliot Griffis）をはじめとして熊本洋学校のジェーンズ（L.L.Janes），静岡藩校のクラーク（Edward Waren Clark），福井藩校，新潟英語学校，東京英語学校で教えてい

たワイコフ（Martin Nevius Wyckoff），長崎広運館のスタウト（Henry Stout）といつた人々が，文部省学監として招聘されたマーレイ（David Murray）と共に彼等の属するオランダ改革派教会を通じて，フルベツキ，フエーリスの斡旋によつて来日したことを知るのである。又，高橋是清が，アメリカへ渡る前に，ドクトル・ヘボン夫人及び宣教師バラー夫人に英語を学んだといわれているが，(270) 実はこの宣教師バラー（James Hamilton Ballagh）も，有名なブラウン師と共に，フルベツキ同様，オランダ改革派教会の宣教師であり，ラトガス大学の卒業生であつたのである。バラーは，弟（John Craig Ballagh）と共に，その一生を日本におけるキリスト教普及のために捧げた人であつたのである。このようにみてくると，フルベツキがオランダ改革派教会を通じて行つた活動が，明治初期の日米間における教育交渉史上に果した役割がいかに重要なものであつたかがわかるのである。彼等が日本において行つたことを要約するならば，それはおよそ次のようなものであつた。

まず，グリフイスについてであるが，彼がラトガスに入学したのは，１８６５年のことであり，その翌年，フルベツキとフエリスがラトガスに送りこんだ最初の日本人留学生横井兄弟に会い，各地を案内して回つたといわれているが，その彼が，後に，フルベツキを通じて，福井藩が「お雇い教師」の招聘を希望している旨の通知がフエリス及びラトガス大学にもたらされた際，特に選ばれて，１８７０年（明治３年）に来日することになつているのである。(271) 彼は，藩校明新館の改革と理化学等自然科学の教授を依頼されたのであるが，廃藩置県の際にフルベツキの招きにより，大学南校で理学，化学，地理学，生物学等を教授することになつたのである。(272) しかして，彼は開成学校の化学科を創設し，化学を正科として教授した最初の人として知られるようになつたのである。又彼は帰国後有名な「皇国」（Mikado's Empire，１９０６），Hepburn of Japan 1913，Verbeck of Japan １９００をはじめとして，日本並びに朝鮮に関する７０冊を越える著書をあらわし，(273) 数百に及ぶ論文を雑誌その他に発表し，更に講演等を通じて日本を紹介するため精力的な活躍をしたため，後に日本政府からフルベツキ同様，勲三等旭日章を授与されているのである。(274)

次いでジエーンズであるが，彼は，ウエストポイントの陸軍士官学校の卒業生であるが，彼も又フルベツキ・フエーリス等を通じて，横井兄弟の故郷，熊本藩の招聘に応じて，熊本洋学校のお雇い教師として来日した人であり，教職のかたわら，自宅で聖書の講義を行い，山崎弘道，宮川経雄，金森通倫，海老名弾正，横井時雄，横井時敬，浮田和民，徳富猪一郎を育て，いわゆる熊本バンドの生みの親となつていることはあまりに有名である。その後，彼は大阪英語学校，第三高等学校の教師となつている。(275)

クラークは，息子小鹿をラトガスに留学させていた勝海舟の依頼により，グリフイスの紹介で，静岡藩に藩校教師として招かれた人で，ラトガスの卒業生で，かつ，グリフイスの同級生でもあつた。彼は静岡で２年教えた後，グリフイス同様，開成学校で教えている。帰国後は Life and Adventure in Japan，１８７８ Katz Awa，the Bismarck of Japan，１９０４ 等を著わしている。(276)

ワイコフは，グリフイスの後任として福井藩の藩校教師として招聘され，ついで新潟外国語学校，東京英語学校で教えたが，グリフイスの３年後輩で，１８７２年にラトガスを卒業している。後，宣教師として，再び来日，明治学院等で教鞭をとりながら，日本におけるキリスト教の普及に一生を捧げた人である。(277)

スタウトは，１８６５年のラトガスの卒業生で１８６８年にフルベツキの後任宣教師として，長崎へ派遣され，かつてフルベツキの教えていた広運館(278) の教授となり，ついで長崎で伝道に従事し，特に神学教育に尽したといわれている人である。(279)

最後に我々は，いよいよ我国教育制度の樹立のための最高顧問として正式に政府から招かれることになつたマーレイ招聘のいきさつについてみなければならない。もつとも，実際には，すでにフルベッキらの手によつて「学制」は公布されてしまつていた後であつたから，マーレイは，その実施につとめざるを得なかつたわけであるが，この「学制」の実施のために来日することになつたマーレイ招聘のいきさつに関しては，仲教授も指摘されているように(280)いくつかの異説があり，誰がどのような役割を果したかについては，かならずしも，一致した結論に到達してはいないようである。しかし，様々な説を整理し，総合してみるならば，次のようにまとめることができそうである。つまり先ず，文部省には，はやくからできればドイツ，フランス，及びイギリス又はアメリカ各国から各1名づつ，すなわち計3名（もしそれが不可能な場合は1名でもやむをえない）の教育行政に経験のある有能でかつ著名な外国人を文部省の顧問として雇い入れようとする意向があり，(281)このような文部省の意向は，伺いとして正院に提出されており，正院はこの文部省の伺いを了承して，この外国人顧問雇い入れの事務を岩倉特命全権大使の任務としたのである。しかして，この任務は，教育担当の理事官田中不二麻呂に委ねられるところとなり，使節一行がアメリカに到着するや，田中は，「廃刀論」に敗れて以後，1870年から小弁務使としてアメリカに駐在していた森有礼をはじめとして，ラトガスに学んでいた畠山義成や富田鉄之助(282)アンドヴアー神学校に学んでいた新島襄らの力をかりて(283)アメリカの教育事情の調査と共に，文部省の最高顧問の雇い入れの任務を果さんと精力的な活動を開始していたのである。

田中は，独自の立場から，アメリカ及びアメリカの教育に関する調査研究を進めていた森や，アメリカの大学に学んでいた留学生達とりわけ畠山や新島等の進言に耳を傾けながら，使節団一行の中でも教育に対して特に深い関心をもつていた木戸孝允や伊藤博文等とも協議の上，ラトガス大学の数学，天文学の教授，マーレイとワシントンやボストンで直接面接を行つた末，彼を我国教育制度確立のための最高顧問として雇い入れることに決め，契約書をとりかわすことになつたのである。(284)この契約書によるならば，田中は，日本政府を代表するものとして，アメリカ連邦政府教育局（Bureau of Education）の長すなわち，教育長官と同じCommissioner of Educationの肩書きでマーレイ教授と契約を結んでいるのである。ちなみにマーレイの肩書きは英文においては，一般に単にSuperintendent of Schools and College in Japan 又は，Superintendent of Educational Affairs in the Empire of Japanあるいは，Superintendent of Education in the Empeire of Japan and Adviser to the Imperial Minister of Education とされている。しかしてマーレイは，この田中との契約書にもとづき，文部省の顧問として日本の知識と科学の発展のため帝国の治安をおびやかさないかぎりにおいて，全力をふるつて，最善の教育制度を組織する（organizing …… the best system）任務を負つて来日することになるのである。なお，この契約書において，マーレイは自らの任務を遂行するにあたつて必要と考えられる自由に意見を述べる権利を保障され，開成学校の教頭時代のフルベッキの月給と同額の月給600円と，往復旅費が支給されることとされ，更にその任期は一応3年とされ，更に契約の更新ができること，病気になつた場合における契約解除の条件等についての取り決めが行われているのである。

以上のようにして，マーレイは日本に招聘されることになつたのであるが，このマーレイ招聘にあたつて誰れが最も重要な役割を果したかについて，かならずしも一致した見解はなされていないようである。すなわち，直接契約を交した田中の役割を重視するもの，(285)教え子である畠山らの役割を重視するもの(286)「日

本の教育」（Education in Japan）を刊行して資料を提供した森の努力を買うもの，(287) 伊藤の役割を重んずるもの，(288) 更に，使節団一行の中で，特に教育に深い関心をもつており，田中ともよく気心の通じあつていた，木戸の役割を重んずるもの(289)等の諸説がある。しかし，これらの人々の役割も，結局，フルベッキが幕末から，オランダ改革派教会の海外布教団本部のフエーリスと密接な連絡をとり，数多くの日本人留学生をラトガスに送りこみ，更にラトガスからも何人かのお雇い教師の斡旋をするといつた活動があつてはじめて可能になつたことであり，更に又使節団の派遣そのものが，フルベッキの発案と計画にもとづくものであり，使節団自体，フルベッキからフエーリスあての手紙を携えフエーリスを頼りに渡米していることなどからしても，フルベッキのマーレイ招聘における役割は，けつして軽視することのできないものであつたということができるのである。否，同じオランダ改革派教会に属するフルベッキとフエーリスの斡旋があつたればこそ，マーレイは，はるばる日本にやつてくる気持になつたものと考えられるのである。その意味において，「モルレーは米国リフォームド教会附属のラツトガルスカレージの教授であつたが，フルベッキ，フエリスの両博士の斡旋により文部省の招聘に応じて学監となり，我国教育制度に功労のあつた人だ。(290)」といつている「フエリス和英女学校６０年史」の言葉こそ最も重視されてしかるべきことと考えられるのである。

しかし，だからといつて，日本側使節団に選択の主体性がなかつたわけではけつしてなく，マーレイは日本人の必要に極めてよく合致した人として巧みに選び出された人であつたことも又事実である。しかして，それは，森の要請に応じて寄せられ，森の手で刊行された「日本の教育」に掲載された１３名のアメリカの学界，政界，実業界，官界，宗教界の各界における著名な識者達の日本の教育改革に関する回答書を分析する時より一層明らかになることである。しかし，そのような分析に入る前に，まず，マーレイとは一体どのような種類のアメリカ人であつたのか，彼の生涯とりわけ彼の受けた教育の性格を検討することにより，彼の性格を明らかにしておきたいと思う。というのは，それが単に，何故に彼のようなアメリカ人が使節団によつて選びだされることになつたかを理解するのに役立つばかりではなく，フルベッキをブレーンとし，大隈によつて代表される当時の急進的勢力の台頭の波に支えられて起草され，制定された「学制」が，マーレイと田中らによつて実際に実施されていくその過程において，我国教育制度に対するジエフアソン流の自然の貴族制の考え方に通ずるアメリカ的考え方の影響が，どのように屈折していつたかを見届けるためにも是非とも必要なことであると考えられるからである。

注

(1) 開国百年記念文化事業会：日米文化交渉史，第３巻，教育宗教編，昭和３１年（１９５６）Ｐ２５１

(2) 吉野作造：明治文化全集　第１０巻：日本評論社：昭和３年（１９２８）ＰＰ．１０－１３、ＰＰ．４１－５９

(3) 福沢諭吉：福翁自伝，岩波文庫，昭和４０年（１９６５），ＰＰ３１５－３１８

(4) 福沢諭吉：「西洋事情」，慶応義塾：福沢諭吉全集，第１巻，岩波書店，昭和３３年（１９５８），Ｐ．３４２

(5), (6) Ibid，Ｐ．３４２

(7), (8) 福沢がジエフアソンについて言及しているか所は，Ibid，ＰＰ３２２－３２３，Ｐ．３２７

(9) 丹尾磯之助編：巨人の面影，大隈重信生誕百二十五年記念，校倉書房，昭和３８年（１９６３），Ｐ．１６２

(10) 高橋是清：「高橋是清自伝」千倉書房，昭和１１年（１９３６），Ｐ．１２３

(11) Ibid, P. 123

(12), (13) Alcock, Rutherford : The Capital of the Tycoon, A Narrative of a Three Years' Residence in Japan, 2 Vols, New York, 1863, 山口光朔訳：大君の都一幕末日本滞在記一岩波文庫：昭和38年(1963), P. 201

(14) このことは，日本滞在中の外国人の間においても広く知られていたことである。Griffis, William Elliot : Verbeck of Japan, A Citizen of No Country, New York : 1900, P. 312

(15) 福沢諭吉：学問のすすめ，岩波文庫，昭和41年(1966), P. 5

(16) Ibid, PP. 30—31

(17) Ibid, PP. 12—13

(18) Ibid, P. 11

(19) Ibid, P. 15

(20) 中島太郎：近代日本教育制度史，op, cit, P. 32

(21) このことは，外国人にもよく知られていた事実であり，チェンバレイン(Basil Hall Chamberlain)も日本政府の中堅及び下級の若手の官僚の半数は，福沢の門下生であつたといつている。Griffis : Verbeck of Japan, op, cit, P. 312

(22) 福沢：「学問のすすめ」op, cit, P.17

(23) Ibid, P. 17

(24) 福沢：福翁自伝，op, cit, PP21—22

(25) 福沢：「学問のすすめ」op, cit, P. 15

(26) Ibid, P. 17

(27) Ibid, P. 19

(28) Ibid, P. 19

(29) Griffis, William E : The Rutgers Graduates in Japan : Rutgers College, 1916, PP30—31 に収録されている Ferris, John m. : How the Japanese Came to New Brunswick 及び尾形裕康：学制実施経緯の研究，op. cit, P. 33

(30) Griffis, William, E : The Rutgers Graduates in Japan : op. cit, P. 22, Note and Appendices Ⅲ, Japanese Students in Rutgers College

(31) ワリナー，エミリイ，V. ：田中至訳：新ジョン万次郎伝，共版共同社，昭和41年(1966) P. 66，当時余裕あるアメリカ人達が才能ある貧しい少年がいると養子にし，学校に入れたがつていたことは，ままみうけられることであり，浜田彦蔵のケースも同様の例とみることができる。浜田彦蔵：The Narrative of a Japanese : 中川務 山口修訳：アメリカ彦蔵自伝：東洋文庫，昭和39年(1964), PP. 117—119

(32) ワリナー：op. cit, P69

(33) Ibid, P70

(34) マサチユーセツツにおいては高度な知的訓練を要した航海士の職業は測量士，貿易業者，会計官，簿記係り，代書人，銀行家と共に花形的職業であり，これらの職業につくための必要な学科，特に数学や物理学や天文学は早くから私立学校で教えられていた。Seybolt, Robert F, : The private Schools of Colonial Boston, Cambridge, Harvard Press, 1935 参照

(35) ワリナー：op, cit, P98

(36) Ibid, PP. 126—163, 本山幸彦：明治前期学校成立史：未来社 1965, P. 67

(37) 中浜の話が大きな影響力をもつたのは，後藤や細川に対してだけではなく，他の若い気鋭の武士達，たとえば坂本龍馬といつた人々にも直接，間接に影響を与えていたことは，確かなことである。Jansen, Marius B : Sakamoto Ryoma and Meiji Restoration, Princeton Univ, Press, 1961, 平尾道雄 浜田亀吉訳：坂本龍馬と明治維新：時事通信社，昭和40年(1965), P84, P280

(38) ワリナー：op. cit, PP. 140—141, PP. 149—150

(39) Natherniel Bowditch（1773—1837）は数学者で天文学者，彼のこの著書は，最初1802年に発行され版を重ねること60回以上に及んだといわれる。万延元年遣米使節史料集成，P．154，万次郎の持ち帰つたその他の書籍は，「アメリカ史」，「ジョージ．ワシントンの生涯」，「観測教科書」，辞書，手紙の書き方手引き，航海百科事典，世界地図等であつた。ワリナー：op．cit，P．156

(40) 箕作ははじめ蘭学を学び，次いで英学を修め，蕃書調所英学教授手伝，開成所教授見習，翻訳御用頭取を経た後，フランスに留学している。

(41) 福沢：福翁自伝：op．cit．，P．103

(42) 福沢：学問のすゝめ：op．cit．，P．11

(43) 身分差については，万延元年遣米使節団に随行した玉虫左太夫や，村垣淡路守の日記，国籍の違いについては，グリフイスの書き残したもの，ベルツの日記等によくみられる。

(44) 福沢：福翁自伝，op．cit．，P．110

(45) 福沢：福翁自伝，op．cit．，P．110

(46) 日米修好通商百年記念行事運営会：万延元年遣米使節史料纂成全7巻，風間書房，昭和36年（1961），の第5巻に収録されている。Brooke，George M．Jr：Collected Documents of the Japanese Mission to America 1860 Vol．V，Association for Japan—U．S．Amity & Trade Centennial，1961，清岡暎一訳による。

(47) Ibid，P．84，P．108

村垣淡路守：航海日記，日米両国関係史，時事通信社（中）及び山本晃：航米日録玉虫左太夫略伝，東北印刷株式会社等をも参照のことから様な見方，感じ方の相異がわかる。

(48) Ibid，P．94

(49) Ibid，P．94

(50) Ibid，P．87

(51) Ibid，P．89

このようなブルツク大佐の見方は，一応は当をえたものといわざるを得ないが，当時の我国の指導者がすべて，このことについて盲目であつたわけではなく，横井小楠らが早くから問題の所在を適確に感じとつており，改革を主張していたことは，忘れてはならない点である。

(52) Ibid，P．86

(53) 本山幸彦編：op．cit．，P．154，大久保利謙：森有礼，日本教育先哲叢書，文教書院発行，昭和19年（1944），P．12

(54) 林竹二：「幕末の海外留学生」，日米フォーラム 1964 1月号 P．41 によれば，当時，ロンドンに留学した者は，松村淳蔵，吉田巳次（清次），鮫島尚信，森有礼，畠山純常，松元誠一，浅倉省吾，橋直輔，塩田権之丞，清水謙次郎，三笠政之助，町田久成，吉野清左エ門ら15名であつたとされている。

(55) 大久保利謙：森有礼：op．cit．，P．25

(56) ワリナー：op．cit．，P．297

(57) 本山幸彦編：op．cit．，PP．52—53

(58) ワリナー：op．cit．，P．297

(59) 中島太郎：近代日本教育制度史，op．cit PP．4～5

(60) 東洋館出版社編集部編：近代日本の教育を育てた人びと：東洋館出版社，昭和40年（1965）上巻，P．130

(61) 奈良本辰也編：明治維新人物事典幕末篇：op．cit．，P．177

(62) 福原麟太郎：英語教育事典，The Kenkyusha Cyclopaedia of English，研究社，昭和36年（1961），P．202

(63) ベルツ編：菅沼訳，ベルツの日記，op，cit．，第一部下，P．17

(64) Ibid，P．75

(65) Ibid，PP．75—76

(66) 春畝追頒会：伊藤博文伝：同会，昭和15年（1940），P．

(67) 大久保利謙編：外国人の見た日本：筑摩書房：昭和36年（1961）第三巻明治P．73

(68) Ibid, P. 75
(69) Ibid, P. 75
(70) 梅溪昇：お雇い外国人：明治日本の脇役たち：日経新書：昭和40年(1965), P. 232
(71) Alan Simpson : Puritan in Old and New England : Univ of Chicago : 1955, 大下尚一, 秋山健共訳：英米におけるピューリタンの伝統：未来社刊, 1966年, P. 21—22
(72) 井上久雄：学制論考：op. cit., PP. 128—130
(73) 尾形裕康：学制実施経緯の研究：op. cit., PP. 66
高橋是清：op. cit., P. 170
(74) Griffis, William Elliot : Verbeck of Japan, A Citizen of No Country, New York : 1900, その要約ともいえるものがAmerican Council of Learned Societies ed : Dictionary of American Biographyに掲載されている。
尾形裕康：学制実施経緯の研究：op. cit., PP. 45—55
(75) 吉野作造：明治文化全集第十巻教育篇：op. cit., P. 5
(76) Ibid, P. 20
(77) Ibid, PP. 16—17
(78) Ibid, P. 17
(79) Ibid, PP. 20—21
(80) Riesman, David : The Lonely Crowd : A Study of the Changing American Character, New Haven : 1961, 加藤秀俊訳：孤独なる群衆：1966, P. 12
(81) このような行為は，19世紀のアメリカ人の内部指向的性格の形成を理解する上に，極めて重要なことがらである。当時，いかに彼等が文化的施設の何もない荒涼たる西部の開拓地において疫病，その他の不安に絶えずおびやかされつづけていたか，そして，そのような不安にうちかつために彼等の信仰が，いかに力強い心の支えとなつたか，又反対に彼等の信仰がそのような状況の下にあつて，いかに強化されたかは，どのように強調されてもされすぎることはないというのが，筆者のハワイ大学留学中の指導教官ケッペル博士(Dr. Ann k. Keppel)のフルベッキの性格形成についての意見であつた。
(82) リギンズ及びウイリアムズに関しては，開国百年記念文化事業会：日米文化交渉史 op. cit., PP, 5—10
(83) これらの人々については
開国百年記念文化事業会，日米交渉史，op. cit., P. 11—12
Dictionary of American Biography op. cit 及び岩波書店：岩波西洋人名辞典：昭和31年(1956年)参照
(84) 開国百年記念文化事業会編，日米文化交渉史：op. cit., P. 137
(85) Iddittie Junsay : The Life of Marquis Shigenobu Okuma A Biographical Study in the Rise of Democratic Japan, The Hokusido Press, 1956, P. 61
(86) 尾形裕康：学制実施経緯の研究
(87) 大隈重信八十五年史編纂会：大隈重信八十五年史II，大正15年(1925) P. 123—125
(88) Griffis : Verbeck of Japan, op. cit., P. 46
(89) Schwantes, Roberts S : Japanese and American : A Century of Cultural Relation, New York, 1955 : P. 86
(90) 大隈重信八十五年史編纂会：op. cit., P. 103 Iddittie, op. cit., P. 58
(91) Griffis : Verbeck of Japan : op. cit P. 175
(92), (93) 大隈重信八十五年史編纂会：op. cit., P. 125
尾形裕康博士が，早稲田大学，大学史資料：早稲田大学史記要 Vol 1. No. 1 昭和40年(1965)にPP. 95—118に「大隈

重信とフルベッキ」という論文を発表しておられる。

(94) 丹尾磯之助編：op．cit．，PP．161—162（昭和38年3月5日，大隈会館における座談会，「大隈重信侯を語る」≪早稲田学報≫4月号より），又，PP．159—160をも参照のこと。なお，この資料の信憑性について，筆者は，尾形裕康博士より信ずるに足るものであるとの証言をいただいた。又，博士には本論文を作成するにあたつて種々御指導いただいたので，ここに記して，感謝の意を表する次第である。

(95) 東洋館出版社会編集部編：op．cit．，鹿野政道：大隈重信の教育思想，PP．27—28

(96) Idditie，op．cit．，PP．337—340

(97) ブライアンについては，Dictionary of American Biography，op．cit．，参照

(98) 大隈侯八十五年史：op．cit．，PP．444—447

(99) Lipscomb，Andrew A．& Bergh，Albert E．eds：The Writings of Thomas Jefferson：The Thomas Jefferson Memorial Association，1904

(100) 徳富蘇峰：我が交遊録，昭和13年（1937），丹尾，op，cit，P．93

(101) Randolph，Thomas Jefferson ed：Memoir，Correspondence and Miscellanies from the Paper of Thomas Jefferson，4 vols，Charlottesville Ford，Paul Leicester ed：The Writings of Thomas Jefferson，10 vols：1892—1899．Cabell，Joseph C．Early History of the University of Virginion as Contained in the Letters in Thomas Jefferson and Joseph C，Cabell，Richmond，1856

(102) Abernethy，Thomas Perkings ed：Thomas Jefferson：Notes on the States of Virginia，Harper Torchbooks，1964「覚え書」のauginal copy の翻訳は，アメリカ学会訳編：原典アメリカ史，第2巻—革命と建国—岩波書店，昭和29年（1954），PP．237—262に掲載されている。

(103) Ibid，PP．250—252

(104) Ibid，P．244

(105) Griffis：Japanese Students in Rutgers College，op．cit：P．21，P．24

(106) フルベッキは，1874年（明治7年）にラトガス大学（Rutgers College）から名誉神学博士（honorrary degree of D．D．）の称号を授与されている。
Griffis：Verbeck of Japan：op．cit，P．278

(107) Ibid．，P．130

(108) 尾形裕康：大隈重信とフルベッキ，op cit．，P．105，尾形裕康：学制実施経緯の研究，op．cit．，PP46—47，Griffis：Verbeck of Japan：op．cit．，P．185，Griffis：Japanese Students in Rutgers College，op．cit．，PP．21—26，日米文化交渉史：op．cit．，P．137，大隈重信編：開国五十年史：op．cit．，P．702とP．703の間に挿入された写真。

(109) Griffis：Verbeck of Japan：op．cit．，P．185

(110) Ibid，P．130

(111) Ibid，P．185

(112) このフルベッキ東京招聘は，大隈や副島の推薦により元佐賀藩主で新政府の要職にあつた鍋島閑叟の建議によるとされている。尾形裕康：学制実施経緯の研究，op．cit，P．47

(113) もとの言葉は，parliamentとなつている。

(114) Sir William Blackstone イギリスの法律家，オクスフォード学教授

(115) アメリカの経済学者Athur Latham Perry（１８３０－１９０５）の"Elements of Political Economy" １８６６のことであると思われる。Perryは通俗的な経済学教科書の著者として有名。

(116) このことについて，後に高橋是清は「…先生が大学南校に聘せられて東京に移られると同時に肥前生と称えられたる書生の一団が，同じく大学南校に転向して来た位であつた。」といつている。高橋是清著「高橋是清自伝」千倉書房版，昭和１１年，（１９３６年）Ｐ．１７６

(117) Griffis：Verbeck of Japan：op．cit．，ＰＰ．１８５－１８８

(118) もち論，最高議決機関とはいつても，公議所は，貢士対策所が改組されたものであり，諸藩士代表の建議の機関にすぎず，行政から独立して対等の力をもつものではなかつたことは注意を要する点である。
大久保利謙：森有礼：op．cit．，Ｐ．２８，尾形裕康：学制実施経緯の研究：op．cit．，Ｐ．４８　尾佐竹猛：日本憲政史の研究，一元社，ＰＰ３６１－３６２

(119) Mori Arinori：Religious Freedom in Japan，A Memorial and Draft of Charter，Privately Printed

(120) Griffis：Verbeck of Japan，op．cit．，Ｐ．２５２

(121) 外山正一は，幕府から１８６６年に箕作奎吾，菊地大麓，林薫，中村敬宇ら１３名と共に英国に留学したことがあり，英語はすでによく出来たはずである。

(122) 高橋：op．cit．，Ｐ．９５

(123) 高橋：op．cit．，Ｐ．９９

(124) 大久保利謙：「森有礼」，op．cit．，Ｐ．２９，　木村匡：「森先生伝」Ｐ．２０

(125) Mori Arinori：On A Represeutative System of Government for Japan，Strictly Private（１８８４）との資料は，その他の森にかんする資料とともに林竹二教授にみせていただいたものである。ここに付記して感謝の意を表する次第であります。

(126) Mori Arinori：Religious Freedom in Japan，op，cit．，Ｐ．２０

(127) Ibid，Ｐ．１２　及びMori Arinori：Life and Resources in America，Washington，１８７１，Ｐ．１３　に最もよく彼の考え方が表現されている。

(128) 梅溪昇：お雇い外国人，明治日本の脇役たち，日経新書，（昭和４０年），１９６５年　Ｐ．２２５

(129) 大久保利謙：森有礼，op．cit．，ＰＰ．２８－３６

(130) Iddittie：op．cit．，Ｐ．１３４
明治文化史Ⅲ op．cit．，Ｐ．４７２
廃藩置県はパークスをも驚かしたといわれる。

(131) 尾形裕康：学制実施経緯の研究，op．cit．，Ｐ．５６

(132) この廃藩置県による混乱と動揺について，グリフィスは彼の勤めていた福井藩の藩校日新館のようすをつたえている。Griffis，William Elliot：Mikado's Empire：Harper & Brothers，Publisher，New York，１８７６，ＰＰ．５２６－５２７

(133) 倉沢剛：小学校の歴史，Ⅰ，op．cit．，Ｐ．１９４

(134) 井上久雄：学制論考：op．cit．，ＰＰ．１２６－１２７

(135) 内田正雄は榎本釜次郎，沢太郎左衛門，赤松大三郎，田口良直，津田真一郎，西周，伊藤玄白，林研海らとともに，１８５５年幕府からオランダ留学を命ぜられている。
内田，榎本，沢，赤松らは海軍について学び，津田と西はライデン大学で政治学を学んだ。
明治文化全集：第１０巻教育篇：op．cit．，Ｐ．４

(136) 学制取調掛の経歴については，倉沢剛，op．cit．，ＰＰ．２１２－２１５参照

(137) Arthur Latham Perry（１８３０－１９０５）

のことで，アメリカの経済学者でウイリアムカレッジの歴史学及び経済学の教授，通俗的な経済学教科書を著わし，広く読まれたといわれる"Political Economy"もその一つ。

(138) Alexander Freiherr von Humboldt（1769－1859）のことで，ドイツの自然科学者で地理学者Harl Wilhelm F．V．Humboldt の弟，ウイーン大学で自然地理学を講義していた。"Cosmos"は"Kosmos"の訳，岩波西洋人名辞典参照

(139) Griffis；Verbeck of Japan，op．cit．，P．204

(140) 稲富栄次郎　明治初期教育思想の研究，昭和19年（1944），P．118－128

(141) 吉野作造：明治文化全集第10巻：op．cit．，PP．2－5

(142) 倉沢　剛：op．cit．，P．215

(143) 高橋是清：op．cit．，P．171

(144) 同時に我々はフルベッキ同様，ヨーロッパもアメリカも共に熟知していたと考えられる森のような人が，フルベッキと共に仕事をしていた時期のあつたことも忘れてはならない。

(145) 大久保：明治文化資料叢書第八巻：op cit．，P．23

(146) 国民教育奨励会編纂：教育五十年史：民友社，大正11年（1922）．P．1

(147) 大久保利謙：明治文化資料叢書，教育編，op．cit．，P．7

(148) Griffis，Verbeck of Japan，op．cit．，P．18
グリフイスは，天皇が開成学校におでましになつた時，フルベッキが苦心して作つた玉座について反動的で帝国主義的なプロシヤ的考え方に合致するよう，おろかにも理想化された場面と皮肉つているところなど，グリフイスとフルベッキの性格の相違がうかがわれて面白い。もつとも，その仮の玉座というのは，フルベッキが，自宅の応接室の一番良い腰掛けに妻のインドショールをまきつけて，作つたもので，フルベッキの方にもいささかいたずらめいたところがみられる。P．267

(149) Schwantes：op．cit．，P．89

(150) Griffis：Verbeck of Japan，op．cit．，P．256，P．276

(151) Mori Arinori：Life and Resources in America，Washington，1871 original edition，P．13
しかし，森もフルベッキと共に，共和制のよさについては知りつくしており，それに強いあこがれをいだいていたことも又事実である。又森が天皇制と共和制（代議制）とをどのように結びつけて考えていたかは，Mori Arinori：On a Representative System of Government for Japan，op．cit．，P．22に明らかである。

(152) Griffis，Verbeck of Japan，op．cit．，PP．330－331

(153) Ibid　P．184

(154) Ibid　P．262

(155) Ibid　P．18

(156) 尾形：学制実施経緯の研究：op．cit．，P．69

(157) 文部省第一年報：1873年（明治6年）P．153

(158) 文部省第二年報：1874年（明治7年）PP．466－467

(159) 尾形：学制実施経緯の研究：op．cit．，P．45

(160) Griffis：Verbeck of Japan．op．cit．，P．256

(161) Ibid，op．cit．，P．260

(162) Ibid，P．175

(163) Ibid，P．261

(164) 岩倉具視書簡「米人フルベッキの条約改正建白書回付けを求む」
尾形，「学制実施経緯の研究」，op．cit P．58

(165) Ibid．，P．255

(166) 二つ折大判洋けい紙（折つて約13×16

インチ大）

(167) Ibid., P. 263, P. 188

(168) Griffis : Verbeck of Japan : op. cit., P. 256

(169) Ibid., P. 260

(170) 大塚武松：岩倉具視関係文書 第二岩公覚書 明治4年：昭和4年（1929）PP. 161—162

(171) 尾形裕康：「学制実施経緯の研究」op. cit., PP. 40—41

(172) 土屋忠雄：明治前期教育政策史の研究，op. cit., P. 176

(173) 森中章光編：新島襄先生詳年譜，同志社校友会，昭和34年（1959） P. 87 によれば「理事功程」は，田中の通訳をつとめていた新島が，まとめ，それに若干用語，字句の訂正，文字の削除が施された上，提出されたものとされている。

(174) Griffis : Verbeck of Japan, op. cit., P. 264

(175) 彼のこの計画がいかに図にあたつたかについては，日米交渉史Ⅲ，宗教編：op. cit., PP. 15—16

(176) Griffis : Verbeck of Japan, op. cit., P. 260

(177) Ibid, P. 262

(178) Ibid, P. 188, PP. 189—190

(179) Ibid, P. 256, 彼は"the long longed for toleration of Christianity"と表現している。

(180) Ibid., P. 277

(181) 高橋：op. cit., P. 176

(182) Griffis : Verbeck of Japan : op. cit., P. 277

(183) Ibid., PP. 263—264

(184) Ibid, PP. 267—268

(185) Ibid, P. 269

(186) Ibid, P. 269

(187), (188) 尾形裕康：学制実施経緯の研究：op. cit., PP. 60—61

(189) 大隈侯八十五年史：op. cit., P. 435
12条からなる約定書は，PP. 434—435に掲載されている。

(190) Iddittie, op. cit., P. 145

(191) 井上久雄：学制論考，op. cit., PP. 128—130

(192) この佐賀勢を中心とするマイノリティーグループの結集について，大隈侯八十五年史は「由来佐賀人は薩長人のように協せず，互ゐに孤立する傾きがあつた。けれども文明的施設については，大木，江藤も常に君（大隈）とよく話し合ひ共に手を携へて進んだ。」といつている。 大隈侯八十五年史：op. cit., P. 441

(193) 旧幕臣であつた箕作と内田が，フルベッキに近く，又，福井藩が横井小楠，グリフィス等を通じてフルベッキとつながりをもつていたことは，よく知られるところである。

(194) 井上久雄：学制論考：op. cit., P. 129

(199) 大隈重信：早稲田講話，P. 385，大隈侯 八十五年史：op. cit., PP. 437—438

(200) Ibid., P. 438

(201) Ibid., P. 426

(202) 6年すぐさま，北条県，鳥取県，福岡県，名東県に暴動が起つている。
金沢：op. cit., PP. 1004—1013

(203) 明治文化史：op. cit., PP54—56

(204) トク，ベルツ編：菅沼竜太郎訳：ベルツの日記，第一部上，岩波文庫 昭和39年（1964），P. 96

(205) 大木と岩倉がいかに近い関係にあつたかは岩倉具視関係文書（op. cit）をみれば明らかである。

(206) 大隈侯 八十五年史：op cit., P 525

(207) 江藤が後藤と共に征韓論を唱えたのは，「征韓によつて事を外に構へ，その騒ぎに乗

じて，薩長の権力を打破り，新たに国民的政府を打建てようとした」ためであるといわれている。 Ibid， P. 521

(208) Ibid， P. 537

(209) 井上久雄：学制論考，op. cit.， P. 188， P. 307

(210) 倉沢 剛：小学校の歴史Ⅱ， PP. 23—30

(211)，(212) Griffis：Verbeck of Japan：op. cit.， P. 267

(213) 文部省第二年報，P. 390

(214) Ibid.， P. 390

(215) 高橋是清：op. cit.， PP. 157—158

(216) 入沢達吉「レオポルド．ミユルレル」中央公論（第48年第9号）

(217) 高橋是清：op. cit.， P. 158

(218) 文部省第一年報：op. cit.， P. 154

(219) 文部省第二年報：op. cit.， PP. 108—109

(220) 高橋是清：op. cit.， P. 170

(221) Idid.， P. 171

(222) 尾形裕康：「近代日本建設の父フルベッキ博士」早稲田大学社会科学研究所「社会科学討究」第七巻：第一号（昭和36年）

(223) 直教師のこと

(224) 内閣総理大臣官房総務課所属公文録，明治6年11月文部省之部，傍点（筆者）の部分からも，フルベッキは，むしろ意に反してやめさせられたものであることがわかる。なおこの資料には，野間教育研究所の寺崎昌男氏，国立教育研究所の佐藤秀夫氏の助言と助力によつてめぐりあうことができた。ここに附記して，感謝の意を表する次第である。

(225)，(226) Ibid.，内閣総理大臣官房総務課所蔵公文録

(227) Griffis：Verbeck of Japan：op cit.， PP. 275—276
梅溪昇：op. cit.， P. 75—76
（Griffis： Mikado — Institution and Person， Prinston University Press，（1915） PP. 171—172）

(228) Griffis：Verbeck of Japan：op cit P. 277

(229)，(230)，(231) 大隈侯八十五年史：op. cit.， P. 430

(232) ＜書評＞土屋忠雄：井上久雄著「学制論考」，尾形裕康著「学制実施経緯の研究」，倉沢剛著「小学校の歴史Ⅰ」，教育学研究，第31巻，第3号（1964年）昭和39年9月 PP. 222—226

(233) Schwantes， Roberts &：Japanese and American， New York， 1955

(234) 井上久雄：「学制論考」op. cit.， P. 358

(235)，(236)，(237) 入沢達吉：レオポルド．ミユルレル（本邦医学教育制度の創始者）中央公論 第48年，第9号，549号，P. 297

(238) Griffis：Verbeck of Japan：op. cit P. 267

(239) トク・ベルツ編 菅沼訳：op. cit.， P. 第二部上巻，PP. 81—84，PP. 92—93．第二部下巻 PP. 7—10，PP. 14—16 その他

(240) 井上久雄：学制論考：op. cit.， P. 358

(241) 倉沢剛：op. cit.， P. 213
尾形裕康：学制に関する諸建白—ホフマン（T. E. Hoffmann）建議実効の疑，早稲田大学教育学部学術研究 第15号 PP. 1—14
尾形裕康：我が医学教育近代化推進のホフマン，早稲田大学大学院文学研究科紀要 第12輯（1966） PP. 17—33

(242) 入沢達吉：op. cit.， P. 296

(243) Allgemeines Staatsrechts 2巻（1851—52）のことと考えられる。岩波人名辞典

(244) Griffis : Verbeck of Japan, op. cit., P. 280

(245) Griffis : Verbeck of Japan、op. cit., P. 280

(246) 梅溪昇：op. cit., PP. 78－80

(247), (248) フルベッキの帰国後の生活については，高橋是清：op. cit., PP. 174－175

(249) Demarest : op. cit., P. 25

(250) Demarest : op. cit., PP. 75－76

(251) Griffis : Japanese Students in Rutgess College : op. cit., P. 26

(252) Ferris : How the Japanese Came to NewBrunswick : op. cit., P. 30

(253), (254) Griffis : Japanese Students in Rutgers College : op. cit., P. 26

(255) Ibid., P. 21　P. 24 彼等は，森が小弁務使として、渡米した際，34名の留学生をひきつれていたが，そのうちに随員三名矢田部良吉，名和道一，外山正一の外に，荒井常之助（奥邃），神田乃武らと共に，木村，大儀見の両名が含まれていた。林竹二，幕末の海外留学生ーその1，日米フォーラム，1961，1，PP. 33

(256) 山本秀煌：フエリス和英女学校六十年史：フエリス和英女学校：昭和6年（1931年）P. 43

(257) Ferris : How the Japanese Came to New Brunowick, op. cit.,
この文献はフエリス自身によるものである。

(258) 山本秀煌：op. cit., PP. 36－37

(259) Griffis, William Elliot : The Rutgers Graduates in Japan, op. cit., P. 21. Notes and Appendices のⅢ, Personal Notices 参照。

(260) 林竹二：幕末の海外留学生ーその1，日米フォーラム，1964，1
op. cit., P. 39

(261) Ibid., P. 37

(262) 山本秀煌：op. cit., PP. 38－39

(263) Griffis, William Elliot : The Rutgers Graduates in Japan, op. cit., P. 22

(264) Demarest : op. cit., P. 443

(265) Griffis : The Rutgers Graduates in Japan : op. cit., Notes and Appendices V :
Inscription of the Monuments in the Japanese Lot in Willow Grove Cemetery, New Brunswick N. J.　P. 27

(266) Stevenson, Robert Louis Balfour : Familiar Studies of Men and Books, Sansom, George, B. : The Western World and Japan : Cresset Press, 1950 : 金井円，多田実，芳賀徹，平川祐弘：西欧世界と日本：筑摩書房，昭和41年（1960）上巻　P. 335

(267) 上の表は，Grillis : Japanese Students in Rutgers : op. cit., PP. 21－26　Demarest : op. cit., PP. 442－443 を主たる資料として作製したものである。

(268) Griffis : Verbeck of Japan : op. cit., PP. 168－169

(269) 高橋是清：op. cit., P. 164

(270) 高橋是清：op. cit., P. 19
バラーについては，日米文化交渉史：op. cit., PP. 12－13

(271) 福井藩主松平春嶽がかつて，横井小楠を福井に招聘し橋本左内なきあとの藩政改革の指導をまかせていたことは有名な事実であり，その横井の甥の留学先ラトガスからグリフイスが藩校明新館の改革のために招かれていることは単なる偶然の一致以上のものがあつたように考えられる。なお，グリフイス自身の専門的研究として，金子忠史：グリフイスと日本(一)，京都大学教育学部紀要XII，1966 PP. 197－214をあげることができる。

(272) Griffis : Verbeck of Japan : op. cit P. 253

(273) 金子忠史：op. cit., P. 200

(274) Dictionary of American Biography, Demarest :A History of Rutgers College, op.cit., 参照

(275) 岩波西洋人名辞典, op. cit., 参照

(276) Griffis : The Mikado's Empire : op. cit., P. 527
岡田章雄編：外国人のみた日本Ⅱ 筑摩書房, 昭和36年(1961) PP. 277—292にクラーク自身の書いた「静岡学校の思い出」という文が掲載されている。

(277) Demarest : op. cit., P. 440

(278) 済美館の後身で, 後第6大学区第一番中学に改組されている。

(279) Griffis : Verbeck of Japan : op. cit., P. 184
Demarest : op. cit., P. 440

(280) 仲新：教育行政史上における David Murray と「学監考案 日本教育法」, 教育学研究：金子書房：第23号, 第2号 PP. 39—51

(281) 尾形裕康：学制実施経緯の研究：op. cip., PP. 137—138

(282) 本稿237頁参照

(283) 大隈重信編：開国五十年史論 op. cit., 上巻, P. 707

(284) この契約書(Contract with Japanese Government)はアメリカ合衆国国会図書館所蔵の David Murray Collection の中の Personal Papers (File Ⅲ)に収録されている。

(285) 教育学術界：11の3(明治38年6月)

(286) 横山健堂著：文部大臣を中心として評論せる日本教育の変遷 PP. 73—74

(287) 大久保：森有礼：op. cit., P. 47

(288) 高橋是清：op. cit., P. 162

(289) 日米文化交渉史 第三巻 op. cit., P. 312

(290) 山本秀煌：op. cit., P. 19